

して日本が機軸となって運営している特徴をいかしながら、2000年の台湾、2003年に予定されている韓国のほか、今後は、シンガポール、オーストラリア、米国西海岸などでの開催を通して、環太平洋会議としての新しい発展を目指している。

上記の観点にたつて、今回は招待講演を増やし、10件の招待講演、22件の一般講演、7件のポスター講演を、すべて、参加者全員が聞いて討論するシングルトラックの全体会議方式で行った。参加者は、日本77名(内外国人9名)、米国2名、カナダ1名、英国1名、韓国7名、台湾2名、タイ1名の計91名で、日本と外国の比率は3:1であった。

幸い天候に恵まれ、東大構内はまさに黄金色の晩秋の景色に包まれていた。初日は、私自身をふくめ、廣瀬通孝教授 (General Co-Chair)、中津良平博士の3名による我が国におけるVRの最新研究発表から始まり、2日目には、Mark Billinghurst博士によるウェアラブルの講演があった。会場からは、Cohen教授やMartens教授などが議論に積極的に参加し、国際会議の場の雰囲気は弥が上にも盛り上がっていた。数年前からICATは若手の研究者が中心となって運営しているが、今回も広田光一助教授、稲見昌彦博士、橋本渉博士、長谷川晶一博士などの少壮の研究者が活躍していた。今後のVRにとって頼もしいかぎりである。

当初、予定していた英国のRobert Stone教授は、充実した内容の論文をProceedingsに投稿し、本人も日本での招待講演を楽しみにしておられたが、直前に母君が急に緊急手術のために入院となったため、イギリスを離れることができず、しかも病院が辺鄙なところにあり遠隔講演もままならぬままキャンセルとなってしまった。しかし、ちょうど別の会議で来日していたPaul Milgram教授が、快く招待講演を引き受けてくださり、また、佐藤誠教授、竹村治雄教授、池井寧助教授も特別セッションを企画して講演いただくなどのご協力で、当初よりもなお充実した会議とすることができた。この場を借りて、心から御礼申し上げます。なお、Stone教授については、のちほどご母堂が無事一命をとりとめた旨の報告を得て、関係者一同胸をなでおろしたのであった。

さて、この会議は、高度な学術をくつろいだ雰囲気の中かで議論しながら深めていくことを狙いとしている。いわばギリシャのシュンポシオンが、その理想にある。シュンポシオンのように豪華に饗宴というわけには予算の関係でいかないのであるが、何とか工夫しながらそれに近づく

努力をしてみた。例年恒例のディナートークでは、立食式を避けテーブルでゆっくりと食事をとって、広瀬茂男教授のロボットの話がうかがった。食事中は、東京大学のフィロムジカ有志によるクラシック音楽の演奏を楽しみつつ談笑し、講演のあとにはロボット談義を目いっぱい堪能できたと思う。

今回は、新たに最終日に、ランチョントークも企画した。工学部6号館に食事をケータリングしてもらい、Milgarm教授の講演を満喫し、その後、テクニカルツアーへと移行したのである。因みに、テクニカルツアーについては、東京大学のバーチャルリアリティ研究教育共同体(VRラボ)に参加している研究室が中心となつてご協力いただいた。厚く感謝申し上げる次第である。

論文賞は、今回からはIEEE-VRと同じスタイルの論文審査方式を採用し、事前に投稿論文を審査員が読んで評価し、その投票により決定した。厳選な審査の結果、下記の論文が栄誉ある論文賞を手にした。

Takayuki Iwamoto, Taro Maeda and Hiroyuki Shinoda: Focused Ultrasound for Tactile Feeling Display.

なお、最終日には、Kwang Yun Wohn教授に韓国のVRの状況を講演いただくとともに、同教授によって2003年の韓国開催が宣言された。それに先立ち、2002年12月に第12回ICATが引き続き東京大学で開催される。次回、山上会館での再会を期して閉会した。

◆プログラム担当より

池井 寧

Program Chair

第11回のICATは、昨年度の開催地の台湾大学から再び東京大学の山上会館に戻って、昨年12月初旬に開催された。今年のプログラムの中で招待講演については、事前の計画から若干の変更を余儀なくされた。館大会長の総括記事に書かれているように、最初の招待講演をお願いしていたRobert Stone教授が直前に来日出来ないことが判明し、急遽Paul Milgram教授のLunchen Lectureが最終日に設定されることになった。Stone教授のキャンセルは残念ではあったが、Milgram教授の講演を拝聴できたのは誠に幸運であった。これは実は大会長の迅速なりカバリ采配に負っており、プログラム担当としては良い勉強させて頂いたと思う。

本年のテクニカルセッションは、Billinghurst 博士の HIT Lab の研究紹介、Wohn 教授による KAIST の VR 研究紹介、広瀬茂男教授のロボット研究紹介が当初の招待講演であり、大変素晴らしい講演者を集めることができたと考えている。この他にも招待講演を依頼していたのだが、どうしても調整がつかず、最後には企画側で講演を用意することとした。つまり、館教授、廣瀬教授、中津博士のパネル講演であり、佐藤誠教授、竹村治雄教授、池井による (Stone 教授の) 代打講演である。一般セッションは、Visual Display, Algorithm, Human factors, Haptics, Augmented Reality/Mixed Reality, Wearable/Outdoor, Application の7セッション、22 件のペーパーと、7 件のポスター講演から構成されることとなった。例年通り、品質の高い論文ばかりであり、VR の最先端研究の発表の場として、会員諸氏にもっと参加されることをお勧めしたい。

最終日のテクニカルツアーには、東大の中村・岡田研、石川・橋本研、土肥研、館・前田・川上研、廣瀬・広田研のご協力を得て、東大での VR 関連研究を見学できるように設定された。個々の内容は素晴らしいものであったが、それぞれの研究室が分散していたために、特に外国人参加者に案内が不足だった点は反省点かもしれない。

Best Paper Award は、表彰委員会を組織して、査読時に評価の高かった論文を5人の審査員が全て事前に読み、厳正な評価を行なって決定し、バンケットの際に贈呈した。受賞論文タイトルは、Focused Ultrasound for Tactile Feeling Display(T. Iwamoto, T. Maeda, H. Shinoda)であり、他の優秀な論文共々、ICAT のホームページで読むことができる。

本年の論文募集とその査読は、WEB を最大限に活用することにより、従来に比べて投稿者、査読者の負担を軽減することが可能となった。とは言え、これらの環境を実現し、またコンタクトのメール、情報の送付などの膨大な手作業があってそれが実現したわけである。この作業は、広田光一助教授、稲見昌彦博士、橋本渉博士、長谷川昌一助手らの献身的な努力によって行われたことを記して、末筆ながら、深く感謝致したいと思う。

◆会場担当より

稲見昌彦

Executive Committee

今年度の ICAT は VR 学会では6月の人工現実感研究会でおなじみの東京大学山上会館にて開催された。会場に関してはご存じの学会員の方も多と思われるので別の観点から会場の紹介を行いたい。

事前の周知は徹底していなかったものの今回の山上会館での新しい目玉の一つは無線 LAN のサービスである。無線 LAN は最近 JR の駅やファーストフード等の公共的な場所でも試験的に取り入れられ始めており、ノートパソコンと無線 LAN カードさえ用意しておけばケーブル等の引き回しに煩わされることなく高速な通信環境を確保可能となる。

では学会会場と LAN 環境との相性はいかほどのものであろうか? 多忙な参加者の内職が楽になるだけであらうか?

興味深い事例として、日本ソフトウェア科学会の「インタラクティブシステムとソフトウェア研究会」でのチャットシステムを紹介させていただきたい。参加者は HUB 持参で来場し、事前に会場中にネットワークケーブルを張り巡らし即席の LAN を構築する。ではその LAN を用いて何をするか。参加者は発表の最中にプレゼンテーションとは別のスクリーンにて立ち上がっているチャットにて質問やコメントを発言するのである。座長はその発言を要約し、質問時間に質問を行うことになる。手慣れた発表者の場合はコメントを見ながら発表をインタラクティブに修正することも可能である。また発表中に共同研究者により補足が付くことや、専門用語に対する解説が付くこともある。チャットのログは参加者全員が参照することが出来、発表者は発表終了後に自己へのフィードバックとして利用することが出来る。しかしながらこのシステムはある程度バックグラウンドの近い組織内で稼働させないと不要な摩擦か長い沈黙の支配下に入る可能性もある。

大規模な学会会場での LAN 導入事例としては SIG-GRAPH2001 での無線 LAN 環境が挙げられる。このシステムの場合は質問事項を座長宛に投稿するといった形での活用がなされていた。

今回 ICAT ではチャットとメールの間くらいの位置づけとして掲示板システムを導入した。国際会議において